

子宮頸がん予防ワクチンの接種をご希望の方へ

お子様と保護者の方へ ～予防接種に欠かせない情報です。必ずお読みください～

◆ 子宮頸がんと発がん性ヒトパピローマウイルス

- ① 子宮頸がんは、子宮頸部（子宮の入り口）にできるがんで、20～30代で急増し、日本では年間約15,000人の女性が発症していると報告されています。子宮頸がんは、初期の段階では自覚症状がほとんどないため、しばしば発見が遅れてしまいます。がんが進行すると、不正出血や性交時の出血などがみられます。
- ② 子宮頸がんは、発がん性HPVというウイルスの感染が原因で引き起こされる病気です。
- ③ 発がん性HPVは感染しても多くの場合、感染は一時的で、ウイルスは自然に排除されますが、感染した状態が長い間続くと、子宮頸がんを発症することがあります。
- ④ 発がん性HPVは特別な人だけが感染するのではなく、多くの女性が一生のうちに一度は感染するごくありふれたウイルスです。
- ⑤ 発がん性HPVには15種類ほどのタイプがあり、その中でもHPV16型、18型は子宮頸がんから多くみつかるとのタイプです。日本人子宮頸がん患者の約60%からこの2種類発がん性HPVがみつかっています。

◆ 発がん性HPV16型、18型の感染を防ぐワクチンがあります。

- ① 現在使用できるワクチンはサーバリックスとガーダシルという製品です。ガーダシルは、性器にできるいぼ（尖圭コンジローム）の一部（HPV6型、11型によるもの）に対する予防効果があるとされています。
- ② これらのワクチンは、すべての発がん性HPVの感染を防ぐものではありませんが、子宮頸がんから多くみつかるとのHPV16型、18型の2つのタイプの発がん性HPVの感染を防ぐことができるとされています。
- ③ これらのワクチンは、**HPV16型およびHPV18型以外の発がん性HPVの感染を防ぐものではありません**。また、接種時に**発がん性HPVに感染している人に対して、ウイルスを排除したり発症している子宮頸がんや前がん病変（がんになる前の異常な細胞）の進行を遅らせたり、治すことはできません**。ただし、発がん性HPVに感染している人に対してこれらのワクチンを接種しても症状の悪化などは報告されていません。
- ④ これらのワクチンには、効き目をよくするためアジュバンド（免疫増強剤）が添加されています。

◆ 発がん性 HPV16 型、18 型に感染する前にワクチンを接種すると効果的です。

- ① 子宮頸がんは 20 代以降に多いですが、発がん性 HPV に感染してから発症まで数年から十数年かかります。
- ② 発がん性 HPV に感染する可能性が低い 10 代前半に子宮頸がん予防ワクチンを接種することで、子宮頸がんの発症をより効果的に予防できます。

◆ 次の方は接種を受けないでください

- ① 明らかに発熱している方（通常は 37.5℃を超える場合）。
- ② 重い急性疾患にかかっている方。
- ③ これらのワクチンの成分（詳しくは医師にお尋ねください）によってアナフィラキシー（通常接種後 30 分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応を含む）をおこしたことがある方。

◆ 次の方は接種前に医師にご相談ください

- ① 血小板が少ない方や出血しやすい方。
- ② 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方。
- ③ 過去に予防接種で接種後 2 日以内に発熱のみられた方。
- ④ 過去にけいれん（ひきつけ）をおこしたことがある方。
- ⑤ 過去に免疫状態の異常を指摘されたことのある方、もしくは近親者に先天性免疫不全症の方がいる方。
- ⑥ 妊婦あるいは妊娠している可能性のある方（3 回の接種期間中を含む）。
- ⑦ 現在、授乳中の方。

◆ これらのワクチンの効果について

- ① 臨床試験により 10 代半ば～20 代半ばの女性に対する HPV16 型と 18 型の感染や、前がん病変の発症を予防する効果が確認されています。
- ② これらのワクチンの予防効果がいつまで続くかについては、まだ導入されて 10 年にも満たないため、明らかではありません。将来、これらのワクチンの追加接種が必要となる可能性もありますので、今後得られる情報にご留意ください。
- ③ これらのワクチンは、上腕の筋肉に注射します。十分な予防効果を得るためには 3 回の接種が必要です。

標準的な接種スケジュールは、以下の通りです。

サーバリックス 初回接種から 1 ヶ月後に 2 回目、初回接種から 6 ヶ月後に 3 回目。

ガーダシル 初回接種から 2 ヶ月後に 2 回目、初回接種から 6 ヶ月後に 3 回目。

3 回の接種の途中で妊娠した場合、その後の接種について医師にご相談ください。

- ④ 子宮頸がんは多くの場合、発がん性 HPV の持続的な感染や前がん病変の後に発症すると考えられており、これらを予防することにより、子宮頸がんを予防できると考えられています。子宮頸がんを発症するまでには発がん性 HPV に感染後、数年から十数年かかります。臨床試験では、これらのワクチンにより発がん性 HPV の持続的な感染および前がん病変が予防できることが確認されていますが、ある程度進行した子宮頸がんに対する予防効果について確認されているわけではなく、海外で検討が続けられています。
- ⑤ 接種は、必ずどちらか一方のワクチンで完了する必要があります。途中で他方のワクチンに変更することはできません。

◆ 接種後の注意

- ① 接種後に、重いアレルギー症状がおこることがあるので、接種後はすぐに帰宅せず、少なくとも 30 分間は安静にしてください。
- ② 接種後は、接種部位を軽くおさえ、揉まないようにしてください。
- ③ 接種後は、接種部位を清潔に保ちましょう。接種当日の入浴は問題ありません。
- ④ 接種後丸 1 日は、過度な運動を控えましょう。
- ⑤ 注射した部分の痛みや腫れは、体内でウイルス感染に対して防御する仕組みが働くためにおこります。通常は数日間程度で治ります。

◆ これらのワクチンの主な副反応と健康被害発生時の対応について

- ① 重い副反応として、まれに、アナフィラキシー様症状があらわれることがあります。
- ② 接種後 1 週間は症状に注意し、強い痛みがある場合や痛みが長く続いている場合など、気になる症状があるときは医師にご相談ください。
- ③ 医薬品医療機器総合機構法に基づく救済制度と市の対応について
ワクチンなどの生物由来製品を適正に使用したにもかかわらず、その製品を介した感染や副反応などにより、入院が必要な程度の疾患や障害などの健康被害について救済給付を行う「生物由来製品感染等被害救済制度」という公的な制度があります。これらのワクチンによって発生した健康被害は給付対象となります。気になる症状が発生した時は、市が加入する保険でも対応しますので、保健予防課にご相談ください。

問い合わせ先：静岡市保健所 保健予防課 電話 054-249-3173